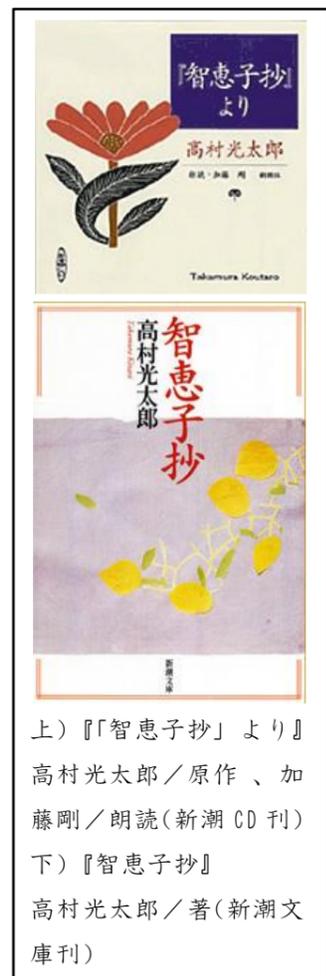


# 谷口吉郎と 高村光太郎

名掛丁東名会 梅津恵一

前々回に続き、谷口吉郎の話だ。彼は東京工業大学の先生であったが、教え子たちが彼につけたあだ名は「墓士」だった。彼は建築家として数多くの建造物を残しているが、以外にも著名人の記念碑やお墓も多く設計している。彼は戦時中に「花の書」と称する文芸や美術のことを語り合う同好会に所属していた。会員には木下杢太郎、野田宇太郎、中野重治や画家の海老原喜之助、彫刻家の木村章平等々、多方面にわたる人たちが参加していた。その人脈から昭和22年に藤村記念館の設計を手掛け、また同じ年に郷里金沢で徳田秋声の文学碑を設計した。戦前には文学碑という言葉はなく、歌碑とか句碑という言葉しかなかったのが徳田秋声の碑が文学碑の第一号となった。後日、彼は「戦後の最も苦しい時に、島崎藤村や徳田秋声の詩魂や文学精神にめぐりあうことで、設計者として歩み出すことができた。そのおかげで記念碑や



上)『「智恵子抄」より』  
高村光太郎／原作、加藤剛／朗読(新潮CD刊)  
下)『智恵子抄』  
高村光太郎／著(新潮文庫刊)

墓ばかりでなく、お葬式の斎場にまで仕事が及んだ」と述べている。彼は生涯で77基もの記念碑や墓碑を設計したが、その中で私が最も感動したのは高村光太郎との出会いだった。

昭和26年に津島青森県知事(太宰治の兄)から谷口吉郎が十和田湖にたつ国立公園記念碑の設計を依頼された際、彫刻の制作に高村光太郎を推挙し、その説得を任された。

高村光太郎は高村光雲を父に持つ日本を代表する彫刻家であるとともに、『道程』や『智恵子抄』などの詩集を出した著名な詩人でもあった。しかし彼は昭和13年に手厚い看病の甲斐なく、最愛の妻を亡くした。妻、智恵子は実家が破産した頃から心身ともに健康状態を悪化させ、統合失調症を発病した後に死んでしまった。智恵子の死後、彼は心の空白を埋めるためか、真珠湾攻撃を称賛し、戦意高揚のための戦争協力詩を数多く発表して、日本文学報国会詩部会長を務めた。ところが日本は多大な犠牲者を出して敗戦国となってしまった。彼は昭和20年8月17日に「一億の号泣」を朝日新聞に発表した後に、かつて親交があった宮沢賢治の実家の紹介で花巻郊外に粗末な小屋を建てて、独居自炊の隠遁生活を送った。それは智恵子を失った心の傷を癒すとともに、戦争に協力した自省の念から出た行動だった。その耐え忍ぶ生活は実に7年にも及んだ。

谷口吉郎は記念碑の彫刻を依頼するために、藤村記念館で知り合いとなった佐藤春夫と草野心平の紹介状を携えて高村光太郎のもとを訪ねた。その時の様子を次のように述べている。

「お彼岸の中日だというのに、岩手県の太田村山口はまだ雪が深い。膝を

没するほどの白雪を踏みながら、村はずれの粗末な小屋にたどりつき、戸をたたく。内部は暗い。私は小さい囲炉裏をはさんで、独居老人と対座した。相手の老人はチャンチャンコ姿で、それが高村光太郎さんである」高村光太郎は説得に応じて山を下り、昭和27年10月に東京中野区桃園にあるアトリエで久し振りに彫塑台に向かった。翌年、記念碑の塑像「乙女の像」が完成した。その後、高村光太郎は劇詩「東京エレジー」の胸像の制作を依頼されたが完成を見ずに肺結核のために死去した。乙女の像は智恵子の面影を色濃く感じさせるものであったが、これが彼の最後の作品となってしまった。命日は昭和31年4月2日で、その日は未明から雪が降りだし、白く積もったアトリエの庭に黄色いレンギョウの花が咲いていた。

お通夜の際に谷口吉郎は草野心平から「葬儀はありきたりのものではなく、高村さんらしい葬儀にしたい」との要望に応じて、青山斎場で祭壇の前に黒い幕をたれ、祭壇は無地の屏風、大谷石の台、白木の棺、枠なしの写真、愛用のコップ一個、その中に黄色のレンギョウの花一枝をといたって簡素な葬儀を企画した。その意図を後に「高村さんの霊を祭るために、一切の雑物を取りのけてしまいたかった…『造形』と『詩』のために骨身を削られた高村さんに親しくしていただいた一建築家の、最後の心尽くしとしたかったのである」と述べている。式はお坊さんの読経から始まり、その後高村さんの肉声を録音した詩「風にのる智恵子」「千鳥と遊ぶ智恵子」「梅酒」の朗読が拡声器からながされた。

「私の後ろの席から、すすり泣きの声が聞こえだした。私はお棺の上の写真を見つめながら、その録音に耳を傾けていたが、目の中に写っている黄いろいレンギョウの花びらが、次第にうるんでいった」と谷口吉郎は葬儀の話をつづけている。



青森県 十和田湖畔に建つ『乙女の像』  
写真提供：十和田奥入瀬観光機構

## 千鳥と遊ぶ智恵子

……

ちい、ちい、ちい、ちい、ちい、—

人間商売さらりとやめて

もう天然の向こうへ行ってしまった智恵子の

うしろ姿がぼつんと見える。

二丁も離れた防風林の夕日の中で

松の花粉をあびながら私はいつまでも立ち尽す。

参考・引用文献 谷口吉郎著作集 第三巻「建築随想」昭和56年11月22日淡交社発行  
高村光太郎著 智恵子抄 平成17年6月10日新潮社発行

お詫言 第18号の「榴岡図書館だより」で野田宇太郎の職歴を中央公論社「文芸」編集長と紹介しましたが、河出書房「文藝」編集長の誤りでした。